

満仲

一名

仲光

世阿弥作

シテ 藤原仲光

ツレ 多田満仲

子方 美女丸

同 幸寿

狂言 仲光従者

ワキ 恵心僧都

地は 摂津

季は 雜

「これは多田の満仲に仕へ申す。藤原の仲光と申す者にて候。さても御子美女御前は。あたり近き中山寺に登せおかれ候ふ所に。学問をば御心に入れ給はず。明暮武勇を御嗜み候ふ由聞しめされ。以ての外の御憤りにて。某に罷り上り御供申せとの御事にて候ふ程に。今日中山寺へ参り。美女御前を御供申し。只今御所へ参り候。如何に申し上げ候。美女御前を御供申して候。

「いかに美女。久しく寺より呼び下さるは。学問能くせよとなり。まづく御経聽聞せんと。紫檀の机に金泥の御経。それく読誦し給へと。美女が前にぞさし置きたる。

「美女は父御の仰せに付きても。住むかひもなき浅香山。手習ふ事もなかりしかば。ましてや御経の一字をだに。読まざりければ今更に。涙に咽ぶばかりなり。

満仲詞

「実にく満仲が子なれば。一寺の賞翫隙を得ず。

御経よまぬは理なれ。さて歌は。

美女 「よみ得ず候。

満仲 「管絃は。問へども言はぬ口なしの。

地 「こは誰が為めなれば。父がさしもに言ひし事に。
跡をつけぬ庭の雪。人に見せんもなにがしが。子
といふかひもなかるべしとて。御佩刀を取り給へ
ば。走りいづるや仲光が。中にて兎角御袖に。取

り付きすがり申しつゝ。危き美女御前の。御身の
程ぞいたはしき。

満仲詞

「いかに仲光。心をしづめて聞き候へ。子供を寺へ
登せおくは。学問の為にてこそ候へ。明暮武勇を
嗜まんには。寺に置きてのかひは何事ぞ。

シテ詞

「御詫尤にて候ふさりながら。折々の御折檻にてこ
そ候へ。先々御佩刀を賜はり候へ。

満仲

「所詮美女を討つて参り候へ。さなきものならば。

明神氏の神も御知見あれ。仲光共にそのまゝには置くまじきぞ。

シテ 「何事も御詫をば背き申すまじく候。まづく御内へ御入り候へ。

シテ詞

「言語道断。以ての外の御怒りにて候。御叱り有るべきとは存じ候へども。かほどまでとは存ぜず候。

いやく 何と仰せ候ふとも。一まづ落し申さばやと存じ候。いかに申し上げ候。只今は余りの御怒りにて。某も迷惑仕りて候。

美女

「如何に仲光。只今自を逃しつるは。仲光が制するによれり。美女を討つて参らせよと怒り給ふを。我物ごしに聞きしなり。はや自が首を取り。父御の御目にかけ候へ。

シテ

「げにく 健氣なる事を仰せ候ふ物かな。所詮何と仰せ候ふとも。一まづ落し申さうするにて候。や。何と申すぞ。又御使の立ちたると申すか。あら笑

止や。さて何と仕り候ふべき。げにや何事も報い
有りける憂き世かな。

詞
「伝へきく阿闍世太子は頻婆娑羅を害せずや。是れ
皆宿縁かくの如し。

美女
「過去にてなせば。

シテ
「現世にやがて。

地
「報いは人の咎ならじ。只自が為すところを。愚に
や恨みある。憂き世の中と思ふらん。たがひに憂
き事を。語り語れば時移る。はや首とれや仲光と。
言の葉も涙も。すゝむこそ悲しかりけれ。

シテ詞
「あはれ某御年の程にて候はゞ。御命に代り候はん
ずるもの。惜しからぬ命も事によりて。心にま
かせぬ口をしさは候。

幸寿詞
「いかに父上。只今の御言葉こそ。幸寿が耳に留ま
りて候へ。早自が首を取り。美女御前と仰せ候ひ
て。主君の御目に掛けられ候へ。

シテ

「何と申すぞ。美女御前の御命に代らうすると申すか。さすが仲光が子にて候。げにく汝が首を取
り薄衣に包み。夜まぎれに遠々と御目にかかるな
らば。さすが親子の御事なれば。よもさだかには
御覧じ候ふまじ。さらば御命に代り候へ。時刻移
りて叶ふまじと。太刀おつ取つて仲光は。我子の
後に立ちよれば。

美女

「美女は余りの悲しさに。仲光が袂にすがりつゝ。

たとひ幸寿を失ふとも。共に自害に及ぶべしと。
泣きかなしみて制すれば。

シテ

「なふお主の命に代る事。弓矢取る身の習ひなり。

美女

「悲しやな互に争ふ命の際。

幸寿

「幸寿もすゝみ。

美女

「美女も立ちよる。

幸寿

「かなたは主君。

シテ

「此方は思ひ子。

美女 「中にてなかく。

シテ 「仲光が。

地 「身は是程に惜しからじ。何とかせましとやあらん
と。猛き心にも。弱り果てたるけしきかな。

美女 「親にだに。惜しまれぬ身を何とたゞ。かく思ふら
ん中々に。情のつらさ如何ならん。

幸寿 「情は人の為ならじ。今此際の御命に。代り申さず
は。弓矢の家の名ぞ惜しき。

地 「かなたこなたも幼き。御身にだにも理の。或は御
主子は惜しゝ。主君をば如何で手にかけんと。心
よわしや白真弓。ゆん手に有るは我子ぞと。思ひ
切りつゝ親心の。闇討に現なき。我子を夢となし
にけり。」

狂言詞 「シカく。

シテ詞 「げにく汝が申す如く。某が心中さつし候へ。又

美女御前を御供申し。何方へも立ち退き候へ。

シテ詞

「如何に申し上げ候。美女御前を討ち奉りて候。

満仲詞

「いしくも仕りたるものかな。さこそ最期の未練に
有りつらんな。

シテ 「いやさは御座なく候。某太刀抜き持つて。少した
めらひ候ふところに。やあいかに仲光おくれたる
かと。是を最期の御言葉にて候。

満仲 「いかに仲光。おこと存じの如く。総じて美女なら
で子と云ふ者なし。今日よりしては汝が子の幸寿
を一子と定むべし。急いで呼び出だし候へ。

シテ 「其御事にて候。美女御前の御別を悲しみ。元結切
り暮に失せて候。同じくは仲光にも御いとま賜は
り候へ。様変へばやと思ひ候。

満仲

「心強くは言ひつれども。さぞ思ふらん美女丸をも。
我子の如く手馴れしに。二人の者に別るゝ思ひ。
「よしや王土に住む習ひ。貴命は誰も遁れぬぞと。
仲光をとにかくに。すかし給ふぞよしなき。

下歌地

上歌

「げにや親子の道なれば。 く。 あはれとや又思

子の。 跡とふ法の事業を。 営み給ふあはれさよ。

く。

ワキ詞

「是は比叡山恵心の僧都にて候。 さても去る子細候ひて。 只今多田の満仲の御所へと急ぎ候。 先々此方へ渡り候へ。 いかに案内申し候。

シテ詞

「誰にて渡り候ふぞ。 や。 恵心の僧都の御下向にて御座候ふよ。

ワキ

「いかに仲光。 さても幸寿が事は候。 まづ某が参りたる由御申し候へ。

シテ

「心得申し候。 如何に申し上げ候。 恵心の僧都の御出でにて候。

シテ

「あら思ひよらずや。 先々此方へと申し候へ。

シテ

「畏つて候。 此方へ御入り候へ。

ワキ

「心得申し候。

満仲

「さて只今は何の為の御出でにて候ふぞ。

ワキ

「さん候只今参る事余の儀に非ず。美女御前の御事を申さん為に参りて候。

満仲

「その事にて候。余りに不思議の者にて候ふ程に。仲光に申し付け失ひて候。

ワキ

「其事にて候。まづ御心を静めて聞し召され候へ。美女御前を失ひ申せとの御使しきりなりしに。仲光心に思ふやう。いかで三世の主君を手に懸け申すべきと思ひ。我子の幸寿が首を切り。美女と申

して御目にかけて候。されば我子に代へて思ふ程の。美女御前の御不審免しおはしませと。美女を引き具し満仲の御前にこそ参りけれ。

「さればこそ猶未練なる美女なりけり。幸寿を殺さば諸共に。などや自害に及ばざる。

「いや／＼諸事をさし置きて。幸寿が仏事と思し召し。美女を助けてたび給へと。涙を流し申しければ。

ワキ詞

満仲詞

地

「猛き心もよわくと。はや領掌を申しけり。仲光
余りの嬉しさに。御盃や菊の酒。仙家に入りし身
の。七世の孫に逢ふ事も。たとへならずや親と子
の。一世のちぎりの。一度逢ふぞ嬉しき。

シテ 「親子鸚鵡の盃の。幾久しきの酒宴かな。

ワキ詞

「いかに仲光。目出度き折なれば一指御舞ひ候へ。

地

「幾久しきの酒宴かな。 (男舞)

シテワカ

「鴛鴦の。友なき水に浮き沈み。

地

「下安からぬ思ひこそあれ。

シテ 「あはれやげに我子の幸寿が有るならば。美女御前
と相舞せさせ。仲光手拍子囁し。只今の涙を感涙
と思はゞ。いかゞは嬉しきるべき。

地 「思ひは涙。よそめは舞の手。交るは袖の。上露も
下露も。おくれ先だつ浮世の習ひ。昨日は歎き。

今日は喜びの都にかへる。是までなりと。恵心の
僧都は。美女を伴なひ帰りければ。仲光も遙に脇

輿に参り。此度の御不審人為にあらず。かまひて手習学問。ねんごろにおはしませと。御暇申して帰りけるが。無慙や幸寿が御供ならばと。暫しは御輿を見送り申し。暫しは御輿を見送り申して。うちしをれてぞ留まりける。